

中高生、学校が伝承にあたって何を大切にしようとしているのか

—2020年チェルノブイリ訪問調査の報告—

伊藤 駿（広島文化学園大学・NPO法人ROJE）
中丸 和（大阪大学大学院・NPO法人ROJE）

本発表における問い

チェルノブイリの中高生や若者が何をどうやって大切にしようとしているか

自分の地域の外や次の世代との関わりをどう意識しているのか

- 
- ・若者がどのようにチェルノブイリのことを知るのか
 - ・地元の人たちが何を伝えようとしているのか
 - ・若者が次の世代や地域外の人々に伝えていくためにどのような活動をしているのか

もくじ

1. チェルノブイリ原発世界遺産化への動き
2. チェルノブイリ訪問の概要
3. ウクライナの学校における伝承活動の概要
4. 何を大切にしているのか（大人）
5. 何を大切にしているのか（児童・生徒）

世界遺産化の動き

- 2021年で事故後35年を迎える節目での申請を検討
- 立入制限区域（30km）を世界遺産化する動き
→特定のモニュメントではなく、区域ごとという特徴
- （当然のことではあるが）世界遺産化、また観光地化に対する意見は様々
→旅行者を受け入れることによる様々な恩恵VS事故現場という経緯をないがしろにしているのではないか、危険なのではないかという感覚（朝日新聞GLOBE+：<https://globe.asahi.com/article/14383536>）

世界遺産化の動き

- （伊藤個人としては）世界遺産という形での事故の継承が適しているのか否かは判断できない。
⇔世界遺産化してこなかったこれまでの伝承や継承が不十分なものであったのか？
- （伊藤個人としては）とはいえチェルノブイリの事故と福島
の原発事故をつなげて考える人は多く、仮に世界遺産化され
るとすればその影響はおそらく出てくる。
→世界遺産化することに何を期待するのか、また何に対する危
機感、違和感を持っているのか（次回調査の課題）

もくじ

1. チェルノブイリ原発世界遺産化への動き
2. チェルノブイリ訪問の概要
3. ウクライナの学校における伝承活動の概要
4. 何を大切にしているのか（大人）
5. 何を大切にしているのか（児童・生徒）

チェルノブイリ訪問

- 2020年2月27日～2020年3月7日の10日間
- ウクライナを訪問
- ウクライナの学校や伝承施設等への訪問
- チェルノブイリ原発ツアーへの参加
- 現地の学校関係者やチェルノブイリ原発事故に関連する施設の関係者へインタビューを実施。

もくじ

1. チェルノブイリ原発世界遺産化への動き
2. チェルノブイリ訪問の概要
3. ウクライナの学校における伝承活動の概要
4. 何を大切にしているのか（大人）
5. 何を大切にしているのか（児童・生徒）

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業

日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

「健康の基本」 科目の授業

- 基礎的な学校カリキュラムの必修科目「健康の基本」
…健康的な生活や安全な行動を子どもたちに促すため科目。
- 特にこの科目を通して、事故の被害を受けた地域で暮らしていく上で知っておくべき安全ルール等の授業を実施。
- 何に気をつけなくてはならないのかを話すとき、なぜ放射線量を気にしなくてはならない状況になったのかについても話がなされる。
→放射線のみならず事故について知る機会。

「健康の基本」 科目の授業

- すべての学校で多くの時間を割いて行われているわけではない。
- 「健康の基本」の教科書
 - …放射線や原発事故に関する項目は多くない。
 - …六年生の教科書：「放射線事故」時の屋内避難などについて数ページの記述があるのみ。

→学校が独自に事故について積極的にプログラムの実施を試みない限りは、この科目を通した事故の伝承に関する取り組みは充実したものとなるわけではない。

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

福島との交流プログラム

- チェルノブイリ原発事故のあった4月26日と福島第一原発事故のあった3月11日
- ウクライナ・日本を訪問（オンラインでも交流）。
- 小学生から中学生までの児童生徒が参加してウクライナと日本の文化について互いに紹介し合う。
→ダンスや歌・折り紙の紹介。
- 子どもたちによって、チェルノブイリ原発事故や福島第一原発事故についての発表。
- 黙祷と事故の収束を願ったお祈り。

日本へのホームステイ

- 学校代表に選ばれた生徒のみが日本に行ってホームステイ。
- プログラムの選抜課題を通して、生徒たちはチェルノブイリ原発事故のみならず福島第一原発事故についても学ぶ。

試験の1つの課題は福島についていくつか自分の意見を書かなければならない。そしてもちろんそのストーリーを描くために準備しました。そして準備をしたときに福島の事故についていろいろな情報を見ました。福島は今一生懸命除染されているんですね。もう近い将来、福島はとても綺麗な街になると思っています。そして実際にそこ（福島：筆者による補足、以下同様）に行って、ガイガーカウンターをもらったんですね。ガイガーカウンターで放射能のレベルはそんなに高くなかったです。そして将来にはチェルノブイリは福島のように綺麗になったら、とても嬉しいと思います。なぜかと言うと、世界中ではチェルノブイリに行くのが怖いとされていますよね。だから、将来にはチェルノブイリに行くことを怖がらないように、つまり行ったら安全だという気持ちになったら嬉しいです。

（3月3日オブルチ学校インタビュー）

- チェルノブイリと福島の2つの事故に関連する発表が子どもたち自身によってなされることによって、2つの事故について学び、事故に関して生徒たちが自らの意見を持つことにつながる。

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

4月26日の取り組み

- 4月26日（事故発生日）は、ウクライナ全国でチェルノブイリ原発事故に関する授業を必ず実施する決まり。
- （A学校）4月26日以外におけるプログラムの多くは、汚染された地域での安全ルールについて。
- 4月26日は、安全ルールのみならず、チェルノブイリ原発の歴史や事故が起こった原因などに関する授業が実施される。
- 処理作業に従事した消防士からの話を聞く機会も準備され、年に一度は全国の子どもが事故について学ぶ機会を得るしくみづくりがなされている。

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

あらゆる授業の素材の中で

- 英語やウクライナ語といった授業の読解教材の題材として、事故に関するものを使用するなど。

中学校・高校のためには（「健康の基本」科目の）特別な先生がいます。でも小学校の場合は、数学の場合は数学だけじゃなくて、だから数学の授業でももし必要であれば、（安全または安全ではない）きのこについてお話できます。全部先生は同じです。でも小学校では「健康の基本」という科目がありません。5年生から9年生までだけ「健康の基本」（があります）。他は自然の科目、自然の知識の科目でも食事についてお話しします。

（3月3日オブルチ学校インタビュー）

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

消防署職員による伝承

- 多くの消防士が事故の消火活動や処理作業に従事。



→事故当時に関する様々な情報を目にすることができ、P消防署は事故について学ぶことのできる施設（伝承施設）にもなっている。

消防署職員による伝承

- 事故の原因や事故の内容についてというよりは、処理作業にあたった消防士たちについて主に伝承。
- 展示活動は国によって保護されているわけではなく、多様な寄付によって活動が継続できている状態。

ウクライナにおける伝承活動

主に学校が関連する伝承活動に焦点を当てる。

主体： 教員・児童生
徒

「健康の基本」科目の授
業
日本との文化交流

4月26日の取り組み

あらゆる授業の素材の中で

主体： 学校外の組
織

消防職員による伝承

チェルノブイリ保護区域組
織による伝承

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- 2016年に設立された国の組織。
- 子どもたちなどに放射能やチェルノブイリ地域の生物保護についてイベントや教育を実施。
- 組織の事務所は、チェルノブイリ原発から30キロ圏内のイヴァンコウ市にあり、イヴァンコウ・プリスキー・キエフの3つのエリアを対象とした教育イベントを開催。
- 3つのエリアには約30の学校があり、義務ではないにも関わらず、その全ての学校と提携して活動を行なっている。



チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- 組織の活動目的

（１）子どもたちにチェルノブイリの事故の原因、事故の影響を伝えること

（２）チェルノブイリの環境保護区域について子どもたちに伝えること

（３）エコロジーについて子どもたちに伝えること

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- 学校と1年の契約を結び、スケジュールを決め実施。
- 対象は幼稚園から大学生まで。
（発達段階によって多様な学習の仕方が採用）
- 幼稚園：絵を見せたりアニメを見せたり。とても簡単な話し合い。
- 小学校から高校：組織で自作したドキュメンタリー動画を見せ、話し合い。
このドキュメンタリー動画には様々なものがあるが、例えば35分程度で事故が起こった時点から今までどのような対策がなされてきたのかがわかる動画など。
- 学習したことを絵にしてもらい、理解の確認を行う。

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- 幼稚園から大学までの間に1回だけそのようなイベントに参加するのではなく、各段階で何度もイベントに参加。
- イベントに参加した子どもたちの変容
(自分も事故のことを伝えていきたいと思うようになる)

そのような傾向はあります。特にキエフの子どもたちです。なぜかというところから辺の子どもたちはやっぱり汚染エリアの近くに住んでいるので、生まれてすぐにいろいろな知識をもらっている。両親から。でもキエフの子どもたちは、ちょっと離れていますので、チェルノブイリのテーマについて聞いたら、興味を持って、その先生たちは次はいつ来るんですかとか、そういう質問をします。

(3月5日チェルノブイリ保護区域組織職員Mさんへのインタビュー)

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- 特に汚染区域から少し離れた地域であるキエフの子どもたちは、イベント参加後の変化が顕著。

…汚染区域に近い地域に住む子どもたちは、小さい頃から親族からの話によって原発事故に関する色々な情報に触れるが、キエフの子どもたちにとっては原発事故について詳しく知る機会が、この組織のイベント以外にあまりないからだろう。

→チェルノブイリ原発事故の被害者が身近にいない子どもたちにとっては、組織が実施しているようなプログラムに参加することが事故について知ることのできる非常に貴重な場となっている。

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- チェルノブイリ保護区域組織では、原発事故の被害を大きく受けた地域の子どもたちだけでなく、その他の地域の子どもたちにも事故に関する伝承活動を積極的に行なっていた。そしてその活動を通して、子どもたちが確実に事故に関する関心を高めており、着実に伝承を行なうことができていた。

もくじ

1. チェルノブイリ原発世界遺産化への動き
2. チェルノブイリ訪問の概要
3. ウクライナの学校における伝承活動の概要
4. 何を大切にしているのか（大人）
5. 何を大切にしているのか（児童・生徒）

A学校の実践

歴史的な問題。つまりこれを忘れたら大変なことになります。私たちは過去がわからないと将来には同じ問題、同じ事故になる可能性がありますので、子どもたちには何があったのか原発はどんなものを絶対伝えたいです。そしてまだそのエリア（A小学校付近のエリア）は汚染されているエリアですので、やっぱり病気の、健康の問題があります。そしてその問題はなんのきっかけでなったのかとか、どうしてその問題があるのかとか、やっぱりこれは放射能に関係があります。これも忘れてはいけません。忘れたら大変なことになります。それで安全なルールについてもお話します。

（3月3日オブルチ学校インタビュー）

消防署職員と協力したプログラム

- 学校は、P消防署に子どもたちを連れてきて、消防士のお話を聞く機会を設ける。
- 特に4月26日は、多くの学校がP消防署の見学を実施。

「展示されている消防士たちを見て、絶対に忘れないようにしてください。処理作業に当たった消防士たちがいなければ、チェルノブイリ原発から800キロの範囲で住むことができなくなっていたため、見学にきている子どもたちがここで生まれることもなかったかもしれない。子どもたちの未来のために亡くなった人がいたということを忘れないでください。」

チェルノブイリ保護区域組織と協力したプログラム

- キエフの子どもたちのように直接の体験者でなく、さらに身近に体験者もいない人間は、どのようにしたら事故について伝承していくことができるのだろうか。

（原発事故の）処理者、障害者、被害者はもうすぐなくなるんですが、でも立ち入り禁止区域のエリアは残るんですよね。だから、つまり私のような2世は（当事者から話を）聞いて、実際にエリアに子どもたちと行って説明できますよ。これはウクライナの歴史の部分ですので、もう寂しい歴史ですが、もう将来にも伝えるしかないと思います。伝えないといけません。

（3月5日チェルノブイリ保護区域組織職員Mさんへのインタビュー）

もくじ

1. チェルノブイリ原発世界遺産化への動き
2. チェルノブイリ訪問の概要
3. ウクライナの学校における伝承活動の概要
4. 何を大切にしているのか（大人）
5. 何を大切にしているのか（児童・生徒）

日本へのホームステイ

- 学校代表に選ばれた生徒のみが日本に行ってホームステイ。
- プログラムの選抜課題を通して、生徒たちはチェルノブイリ原発事故のみならず福島第一原発事故についても学ぶ。

試験の1つの課題は福島についていくつか自分の意見を書かなければならない。そしてもちろんそのストーリーを描くために準備しました。そして準備をしたときに福島の事故についていろいろな情報を見ました。福島は今一生懸命除染されているんですね。もう近い将来、福島はとても綺麗な街になると思っています。そして実際にそこ（福島：筆者による補足、以下同様）に行って、ガイガーカウンターをもらったんですね。ガイガーカウンターで放射能のレベルはそんなに高くなかったです。そして将来にはチェルノブイリは福島のように綺麗になったら、とても嬉しいと思います。なぜかと言うと、世界中ではチェルノブイリに行くのが怖いとされていますよね。だから、将来にはチェルノブイリに行くことを怖がらないように、つまり行ったら安全だという気持ちになったら嬉しいです。

（3月3日オブルチ学校インタビュー）

- チェルノブイリと福島の2つの事故に関連する発表が子どもたち自身によってなされることによって、2つの事故について学び、事故に関して生徒たちが自らの意見を持つことにつながる。

おわりに（ウクライナにおける伝承）

- 事故の伝承に関わる課題
…汚染区域外の子どもたちとの事故に関する認識の温度差

jさん：例えば、リゾート行ったときに、他の地域から子どもたちがきたんですね。その人たちと話したときに、その人たちが全然チェルノブイリに興味がない、全然知識がないんですね。私はいろいろ知っています。なぜならここに住んでいるから。でも他の人たちは全然で、聞いたことがある（程度の）話ですよ。（中略）「リゾートであなたはどこからきたのですか？オブルチから来ました。オブルチってどこですか？チェルノブイリの近くって。おお、チェルノブイリの近くは怖くて、お話したくない。」という経験もありますよ。

伊藤：今もあるんですか？

jさん：今はとてもたまに、よくではない。でもよくあるのはインターネットで知り合いになってどこから？オブルチから（というと相手は）怖くて話をしなかったんです。前に比べると、数年前と比べるとそのような状況はとても変わりました。つまりもうそんなに怖くない（と思われているの）です。

（3月3日オブルチ学校インタビュー）